核家族は子どもにどのような影響を与えているのか

待鳥　「私たちから子どもたちに伝えていくこと」をテーマに、ワークショップを３回開催しました。
いま、親から子へいちばん伝えなくてはいけないのに伝わっていないことは何か。子育てはすごくいいものだよ、私はあなたを育ててほんとうにしあわせだったというメッセージが、育てた立場から継承されていないところがあるのではないかと思うのです。子どもの誕生をどういうふうに迎えたかということもあまり伝わっていない。

背景の１つには、継承の場である家庭が親子バラバラだという問題があると思うのです。私は食卓の問題が大きいのではないかと思うのですね。かつては、家庭と言えば食卓のイメージが出てきて、３世代家族であってもみんなで大勢で食卓を囲んでいろいろな話をする。おじいちゃんの意見、おばあちゃんの意見が出てきて、家訓ではないけれども、家の人の考え方を子どもは自然に受け止めてきたということがあると思います。
いまの家庭の食卓が崩壊しつつあることは、本にも書かれていますよね。半分近くの人が、好きなときに好きなものを個々バラバラに食べる、そういう食卓です。

先日、埼玉県であった早稲田大学の増山均先生のシンポジウムに参加させていただいたんですけれど、そこでいろいろな興味深いお話をうかがいました。
思春期の子どもが親に反抗して家を出ていくということはむかしからよくあることで、家

から出て行くことが問題なのではなくて、出て行った子どもが家に帰ってくるような家庭でないことが問題、帰ってくるためには居心地のよい寝床と食事だという話が出ました。よく言われていることですが、いまは家に帰りたいと思えるような家庭、食事ではなくなっているというのが１つ大きな問題だと思います。

高橋　自分が今まさに子育てをしている世代として、食卓の問題は自分のことのようにいま反省して聞かせていただきました。先日娘に突然「私は結婚したくない」という発言をつきつけられまして、きっと母親のあり方、夫婦のあり方、家族のあり方が彼女にそういうことを言わせる部分があったのだろうと夫婦で話し合ったのです。

自分たちから子どもを育てることの喜びが溢れていない結果、伝わっていない。ただそれは、子どもたちに説いて聞かせるものではなくて、子どもたちは大人たちの背中を見て価値観とか学んでいくんですね。その点で核家族であるとか、閉じた家族のなかでは限界があるとつくづく感じたわけなのです。
少子化というのは１つに、核家族化していった社会がつくりだしていった面が大きいと思うのです。いま私が所属しています日本世代間交流協会は、家のなかだけではなくて地域において世代と世代をつなぐ活動を通して、地域の再構築をしていく世代間交流に可能性を見出して活動をしています。

地域的な関係性を構築していくことが、ある意味家族をも変える。家族のなかだけの問題を家族のなかだけで解決するのではなくて、やはり地域の関係性であるところから家族が変わる方向性もあるのではないかと考えているところです。

現代科学的な価値観が、切り捨ててきたもの

柳沢　いま、話題が食卓のことになったので、そこから話をはじめると味は植え込まれるのです。生物というのは進化のなかで前の情報を優先します。さけが遡上するというのは、もともとの塩分濃度を生まれたときに記憶するからなのですが、それと同じで子どもというのは先に入った情報を記憶します。ですから、先に覚えさせた味がその子のなつかしい味になるのですね。

いま、料理の上手な方がいっぱいいて、スーパーやファミリーレストランに行けば食べることができますから、お母さん方が私の料理より上手ではないかと思い、美味しいものは外食で食べようと考えます。でも子どもは何が美味しいか、美味しくないかは小さい時はわからない。大切なのは家庭の味をいかに教え込むかなのですが、お母さんたちはそこに自信がないからと譲ってしまっている。おそらくそれで、何かのときに帰ってこいというおふくろの味が分からなくなっているのだと思います。

僕の理論でいえば、現代科学に染まったところは少子化にならざるをえない。現代科学の蔓延が少子化の根本です。現代科学は観測科学であり、観測自体がそこで写真をとって時間を止めるわけですから、科学を繁栄させることは時間を止める発想です。未来なんかみなくてもいいですよ、という思考を無意識に裏から蔓延させているわけですから、現代科学に染まれば染まるほど子どもを育てなくなる。子どもは未来ですからね。科学は、時間停止思考で不変を求めて経過を無視するので、子どもや育児を無意識に否定してしまうのです。私流でいうとそういう言葉になります。

待鳥　いま時間停止思考のお話があったのですが、私たちはライフサイクルのなかで３つの時間の流れを持っていると言われます。１つは社会の前線で働いている人たちが持つ時間。一日めいっぱい時間をつかって、少しもボッーとしている時間がないという流れですよね。もう１つは、子どもが育つ時間あるいは高齢者の人たちがいる時間。要するに時計に追われないというか、自然の摂理のなかにある時間です。その間にあるのが地域共同体の時間だと言います。

本来、子どもが育つ時間の流れは時計に追われないところにあるのですが、昭和３０年代以降、第一次産業から第二次・三次産業に社会の視点が移った時点で子どもが育つ環境が失われたと言います。子どもたちが育ちにくい時間のなかで子どもたちを育てていかなくてはいけない状況になってきました。親は、子どもたちに何をしていてもいいよという時間を与えなくなっている。ちょっと子どもがボッーとしていると、「何をしているの！」というかたちのせかし方をするので、そもそも子どもが育つ時間を子どもに与えていないわけです。また、親もそういう時間を持っていない。

柳沢　実は、子どもや高齢者が持っている時間が時なんですね。時計の時間と時をほんとうは分けなくてはいけない。子どもや高齢者が感じている時というのは虚数です。時計という実数では絶対に測ることができないものなのです。

それを時は実数に変わったと科学者や物理学者が言ったので、人々はそうだと思ってしまっている。時が絶対ということになると固定した時になりますので、いまの科学のなかに入れこんでしまつたものは、時間停止思考になってしまったのです。自分の時間を重視して次世代を考えないのは、継続の意味からすると生命の否定になります。世代遮断と少子化は、無意識に埋め込まれた完全再現性思考が要因とも言えるでしょう。

待鳥　たゆたうということを全部排除したのですね。

柳沢　現代科学が住民の間に広がりすぎてしまった。住民は知らない間に時間を止める方に進むから、どうしてもいのちを粗末にする。現代科学が支配すればするほど、世代が断絶するわけです。

待鳥　少子化もその１つの現われですね。いま私たちは、自然の摂理のなかで生きていく力がものすごく減退している感じがします。

柳沢　現代科学が進んでもヨーロッパは少子化が進んでいないのです。なぜかというとこれまたひじょうにずるい話なのですが、ヨーロッパにはマリアがいるのですね。マリアは現代科学と発想がまったく別なのです。

現代科学では時間を止める発想をしていて、かたやマリアは子どもを抱いて止まらない時間にいます。現代科学とはまったく関係ない時間にいます。だから、ヨーロッパではいくら科学を押し込んでも、マリアが残っているから世代遮断の危機は大丈夫なのですね。

待鳥　それはまちづくり、景観にも現われていますね。ヨーロッパでは、全部を壊して新しく近代的な利便性だけのものに建て替えることを絶対にしませんよね。歴史のなかで培われたものをいかにそのまま残していくのか、という視点がありますから、日本とは全然発想が違いますよね。

柳沢　日本と韓国は少子化問題など抱えている矛盾が同じです。それは時間を止める科学の方だけを取ってしまったから、マリア的なものがひじょうに弱くなってしまった。

待鳥　人間は80年ぐらいのライフサイクルがあって、時間の流れもそれぞれです。折ると

ぴったり重なるところに仲間がいると言います。

ゆったり生きている時間には本来いるべきなのは子どもと高齢者。それから思春期、更年期はそれこそ危機の重なりになってしまうのですが、子どもと高齢者は本質的に仲間なんだという話がありました。

子どもを宝物のように育てていく知恵

待鳥　去年から「関係性の構築と価値観の変容」ということを、主要な研究テーマにあげているのですが、ムダなことはしないという発想で子育てをしている人が多いことが目につきます。自分ではそういうつもりはなくても、結果としてそういう言葉を発することが多いわけですね。教育現場でも、受験にいらない科目はやらなくていいとなっているし、家のなかでも子どもがボーッと夢想していると何をやっているのと叱る。子どもの中にある宝物のような部分をそのまま育てていくという発想がなくなっています。

何の役に立つかわからないことにこそ価値があるということもある。そういう価値が見えるように価値観を変容させていかなくてはいけない。眼に見えない、かたちにあらわせない、計算できない、そこに価値があることを伝えて、子どものなかに生きるための大きな力を育てていく。それこそが世代間継承だと思うのです。

高橋　世代間で継承していくものが何かといったら、知識とかそういうものではなく知恵だと思います。知恵は体験から得るもの。人生において一番大きな経験は妊娠・出産だと思うので、そこからあらゆる知恵、経験知を得るのだと思います。マリアの存在ではないですが、人間の根源的なものを評価できる場面というのは、人生において妊娠・出産という時期だと私は思います。私自身、自分の出産を通してひとりの母親としての意識転換がありました。社会の懐の深さを感じ、もっと地域と関わっていかないと母親としてやっていけないのだ、と周囲との関係性の大事さを知ったわけです。

私にとっては、地域があることで自分は子どもを育てていけるのだという発想にもっていかせてくれたものが、妊娠・出産の経験でした。日ごろの子育てにおいてもその感を深めつつあります。妊娠・出産を経験し周りの人とつながっていく価値を体感した人たちが、そのことを伝えられる場がもっと必要ではないでしょうか。思春期の子どもであり、幼い子どもに対して語っていく。そういう場が提供されていくことが重要だとは感じています。

親は伝えるべき経験知を持っているのか

待鳥　ただ、経験自体がかなり空洞化しているというか、伝えるべき経験を持たない親、伝えるべき経験を持たない高齢者になりかけていく人の層が広がっているという大きな問題があるわけです。いわゆる経験知として伝えるのだけれども、それは実際は埋め込まれた知識だったり、経験したと思っているけれどもそれは経験させられただけのことだったりというのがある。

やはり生身で経験したことが伝わらないといけない。妊娠出産で人間的な生身の自分を変革するぐらいの体験をした人はそれを伝えられるかもしれない。ほんとうに迫力のある妊娠出産の話を生身で子どもたちにすると、いままで騒いでいた子がしーんとして集中して聞くという話を聞いたのですが、問題はそれだけ力のある経験をどれだけ伝えられるか。逆に言うと、大人の方も勉強した知識と自分の経験をどこかで融合して、それがあたかも経験であるかのようにしゃべることが増えてきていて、自分自身が痛みを伴って苦労しながら突破してきた経験がなかなか大人も少なくなっているのではないか。いろいろなパターンがあって、どのメニューにしますかと言ってハイと渡されたことしか経験していない大人はけっこういます。それを子どもに伝えようとしても、それは何の力にもならないですよね。

戦争を体験した親の経験は、人生をかけて生き抜いてきた経験であって、自分は経験をしていなくても親から受け取ったものがあります。でもいまは、自分の人生がそこで乗るか反るかの経験だったと子どもに伝えられる親がどれだけいるのでしょうか？

自信を取り戻すことの重要性

柳沢　乗るか反るかの経験は、いつの時代でもみんなしています。戦争のときの人たちは生きるか死ぬかの選択で生きてきたのですが、それと同じようにいまも生きるか死ぬかの選択をみんなやっているのです。それを自分で感じて、どれだけ自分のものにして、相手

に大切なことなんだよと伝えるだけのものを持っているかは別ですが、みんな生きている限り必死で生きているわけです。むしろ問題は、自分が必死でやってきたことをいかに子どもたちに伝えるかの意思が、親の側になくなっていることではないでしょうか。

いまの親たちが体験を伝えるのが空洞化しているのは、自分に自信がないからです。自分より立派な先生方が世の中にいっぱいいるから、そちらの先生方に任せておけば子どもの教育は良いと思っているからです。

待鳥　そこが１つ、価値観の変容のキーワードですよね。自分が親なんだから、自分の伝えるものがいちばん子どもに価値のあるものではないか、という考え方ができないということですね。

柳沢　反復テストなどで完全思考を埋め込まれた者が親となり、完全な答えを求めていく傾向は強まる一方です。不安をいつも抱いて、それを回避するために教育に頼るわけですね。受験に走らざる得ない。親が自信をなくしているのです。

福島　そこはやはり、「教育じゃないよ」と正面きってやっていくことなのでしょうか。

柳沢　教育じゃないよという言い方ではなくて、体験や知恵を重要視する意識改革ですね。いまは教育の教の方にあまりにも偏りすぎでいる。教育は一堂に介して授けられますが知恵の方は１対１とか１対２で相手に伝える。積み重ねをしないといけない。それがないと関係性が薄れてしまい、伝わらないわけです。

ウエーバーフェヒナーの法則をいじりますと、感情は時間や回数に比例するというのが出てくるのですよ。具体例として禁煙マラソンというのをやっている人がいるのですが、そこでメールの回数が多かった者ほど禁煙が成功するというデータが出たのです。これは仮説ですが、要は相手の感情を揺さぶるには回数、刺激の量です。回数が多ければ多いほど、相手の感情を揺さぶります。これを悪い意味に使えば洗脳になる。

福島　当然、教育は洗脳なわけですよね。そうだとすると科学思考、絶対思考をひっくり返していくための教育方法を使って、いろいろな場面で切り返しをしていく必要があるわけですね。学校の教育のなかでもそうですが、私は家庭のなかの方が科学思考というのがまだ馴染みが薄いかなと思う。生活習慣をなんとか、食事がなんとかと言っているほうが、まだ科学的思考が入りにくい分野ではないかと思うのです。

待鳥　ところが、そこが私たちが思っている以上に崩壊しているのです。実際、３０代の

主婦の家庭は壊滅状態になっていると言われています。

福島　離乳食を作るときにも、秤をもって作るとかですね。

待鳥　摺きり何杯とかやっていたら子どもは育てていけない。１人を大事に大事に育てていくのならば出来るかもしれないけれども、３人も４人もいればそんなことはやっていられない。

子育てと科学的思考は相容れないもので、子育てをすればするほど体感的にそんなものはいらないし、そんなものはなくても子どもは育つと実感できます。いまは１人２人を科学的思考の範疇で育てている。科学的思考を破らないまま親を続けてしまうのがやはり問題じゃないかなと思う。

地域のなかで人とつながる力

福島　ある調査で、助産院に行くチームと病院に行くチームに分けたのです。病院では聞き取り調査をすごい活き活きとやってきた調査員の方が、助産院での聞き取りはもうやめると言ってきました。なぜかというと、助産院に入るといきなりちゃぶ台に座らせて「お茶でもどうぞ」。30分ぐらい待たされて、ビデオでも観ててねと言われて、私はこの時間はいったいどうやって使ったらいいのか、これは仕事ではない、と戸惑うわけです。

「明日来た方がいいですか」と聞くと「明日にならないとわからない」と言われて、もうパニックになってしまった。何時から何時でと聞き取り調査の約束しているのに、これはどうしたものかとカリカリきてしまう。
待鳥　お茶を飲んでいるその時間が、ヒヤリングよりも有効に助産院のなかを感じられる機会なのに、それを受け取れないということですね。

福島　そういう発想にはならない。新生児訪問も然りです。病院での調査がとても上手に出来てきた人が、今度２か月目の新生児訪問に行けないのです。電話をしてアポイントを取ったり、自宅を訪問してピンポーンとする作業がすごいしんどいと言う。小学校の子どもを抱えているお母さんたちが何人もそういう発言をしているのには驚きました。

待鳥　ここ数年子どもを狙った事件がすごく起きているので、和光市地域子ども防犯ネット事務局では、保護者だけではなく地域で子どもたちを守ろうという活動をしています。私たち本部にいる人間は、地区自治会とやりとりをしているけれども、私たちがいくら繋がっても校区のお母さんたちが繋がらないといけないので、私たちの方からポスターなどを届けたりするときに、一緒に行ってもらって顔つなぎの機会をつくったりしているのです。自分からピンポーンと鳴らして、ドアをあけて訪ねることは、お母さんたちにとってなかなかしにくいことなのです。

柳沢　それも教育の功罪ですね。絶対思考をしていると、こう言ったら相手がこう返ってくるからこう言おうというシナリオがないと動けないのです。そういうふうに教育されてきているわけです。相手が何か言ってきたら、それを緊張しないでやりとりするのは、これは訓練しないと出来ない。

待鳥　いまはその訓練を自分から避けている。子どもを幼稚園に送っていきますよね。途中にゴミ置き場があってそこに近所の人がいる。同じ幼稚園のお母さんだったらいいのですが、全然違う近所の人だったらもう一回家に引っ込んでいなくなるのを待つといいます。まさに、引きこもりですよね。引きこもりながら子どもを育てなくてはいけない。

福島　私自身も、子どもを育てて公園に行ったときの居心地の悪さを覚えたことがあります。もうちょっとここにいたら、いじめにあうのではないかという思いを抱いて、すごいこわいというイメージが私の中にはあったのですよね。いま振り返れば、それは自分自身が組織にいるほうが楽で地域に馴染めなかった。そこでの訓練というのがまだまだ足りなかったんですね。

待鳥　けっきょく、組織にいても地域で個人でいても、自分をひらいて人とつながるという意味では同じですよね。いまそこの力がすごく低下している。だからといって、とても引っ込み思案で人前でしゃべったりするのが苦手なのかといえばそうじゃないのですよ。決まった場でマイクを持たせるといくらでも上手にしゃべる人たちなんです。一方では、しゃべったことのない人がゴミ置き場にいると出られない。

柳沢　なんでもいらっしゃいではないのですよ。この分野だけなら大丈夫の人なのですね。

福島　仕事の時はとうとうとしゃべるんだけれども、一個人のお母さんになってPTAで自己紹介するときのあがりかたって言ったらないというのは、これは男性化していると言うのでしょうか。

柳沢　組織化、社会化なのでしょうね。社会、組織のなかで特定の頭脳能力を発揮するのと、なんでもいらっしゃい、適当にやりますよというのはどっちが能力が必要かというと、組織の方ではないのですよね。隣の人に挨拶して、「今日は時間がないから失礼します」という能力のほうが、ずっと能力は上なのです。

福島　将来何になりたいかと聞くと、いまの子どもたちはみんな職業を言うわけです。女の子も専門職を必ず言う。ふつうの大人になるという未来が、学校にも発想がない。学校を出て、どこかに就職して、みんな職業人になるって感じなのね。

私は、自己実現はすべて職業の自己実現ということに通じるのかと疑問に感じることがあります。人として人と上手に関わって、楽しく人生を生きていくことが自己実現にならなくて、どこかで勉強して職業につくのが自己実現という図式になってきている。

待鳥　自分のポリシーにしたがって仕事をしていくというのが、私達の時代の優秀な人間だったと思うのです。自分のやりたい仕事が先にあって、入試などの関門を突き抜ければ一つの手段を得て歩いていける人たちだった。いま優秀と言われる人は、言われたことをそのまま全部やって、点がとれれば学校に入ってしまう。

高橋　戦前には、それはそれ、これはこれという価値観があったわけですね。地域や班にそういう文化や思想があった。教育はそこを根絶やしにしたということですね。

尾崎　たとえば、夢はあきらめなければかならず叶うとかですね。あきらめなくてはいけないのですよ。ちょっと楽器ができるだけでオレはミュージシャンになれるといって、いつもやっとこさのアルバイトをしながら生きているでしょう。あんな仕事ではとても子どもなんか産んで育てられませんよ。夢はもって努力すればかならず的な叶うメッセージは、美しそうに見える価値観の押し付けにもみえる。なんか頑張っていれば荒川静香になれるみたいな話ばかりじゃない。そんなことはない。何千人にひとりでしょう。下手な夢をあたえすぎている。

言い方が悪いけれども、社会のなかでの役割分担とか、日常生活で子育てすることがとても大事なんだというメッセージも必要。身のまわりにある日常生活が尊く、子育てすることの楽しさすばらしさを知ることです。宮古島では、役割分担は兄弟のなかできちんと出来ていて、５人兄弟がいれば一人は東京まで出ていくけれども、他は１９歳で結婚して子どもが４人目ですみたいに役割分担が自然に出来ています。多産のお母さんたちが率先して小学校に入っていって、自分の町の良さを教えている。そういう役割分担をしていかなくてはいけない。日本の若者みんなが到達できない夢を見ているのではなく、もっと身

近なものに打込む視点を持たなくてはと思いますね。

澤　でも、友だちと話していると尾崎先生のいう今の若者は、そこまで夢は絶対に叶うと思っていない気がします。夢を追いかけてもあの人みたいにはなれないと分かりつつも、かといってどうしたらいいのかも分からない。むしろ漠然とした不安の方が大きいのではないでしょうか。将来もわからないし、結婚もわからない。そう言っているうちに時間は淡々と進むのですが。

福島　ここ数年、「私は大きくなったらお嫁さんになりたい」と誰も言わなくなっている。小学校から職業訓練をして、例えばパテシエになりたいと職業を言います。平行して結婚して子育てがあるのですが、職業人としての自己実現をずっと求め続けていく。それが、成功の図式なのかもしれない。

務台　お金持ちになりたい、社長になりたという夢が歳がいったときに、なんだこんな夢だったのかと思うようになっているのだと思うけれど、だけど気づいたときには自分には子どもがいないわけです。産めない歳になっている。

女性の幸せは、キャリアウーマンになることではなく、お母さんになって子どもがいてあたたかい家族や人間関係に包まれることだという、そこのところの夢を実現することにみんなが早く気がつくようになるといいと思います。

「ネットワークの再構築」と発想の大転換

高橋　日本世代間交流協会設立当時から、関係性を構築できるようなコーディネーターを養成しようというのがあるんです。ただコーディネーターを実際に養成しても、いまの社会で実際にどこにその人材をおけるのか。需要はあるけれども、実際にどこに置けるのかというポジションが見当たらない。

福島　そもそも関係性を構築できるコーディネーターの発想が科学的であったら意味がないのではないでしょうか。関係性を構築ということすら、いまここで話している関係性の構築とは違う意識なんじゃないかなと思うのね。

待鳥　あらゆるところにそういう人を育てればいいわけで、就職に直結ということでなく

てもいいわけだから。就職の手段として考えると、コーディネーターが果たすべき役割の本質から離れてしまう気がします。

福島　私はコーディネータ養成ではなくて、すでにそこにある関係性のなかにどうやって、ひとりずつの意識が変わってきたということを伝えていけるのかということだと思うのです。

１つ思うのは、あらたなコーディネーター養成ではなくて、すでに関係性を作っていく役割をもっている保健師さんたちに意識改革をしてもらうようなことがあればいいのではないか。それが研修となると科学的思考になるようなジレンマがあるのだけれども、そういうことをワークショップをしていくことがあるかもしれない。それを考えていくときに、生活モデルという言い回しになるのか分かりませんが、企業に勤めている組織人ではない私個人としての生活のなかの捉え方として、これまでの発想を大転換しなくてはいけない。

待鳥　関係性をつないでいくというのは時間、費用を考えていると出来ないです。時間を度外視して何時間でも付き合ってあげるわよ、いつでも電話してね、と自分をオープンにしたところでないとなかなか関係性は築けません。

「５時までは電話オッケーだからそれまでに電話してください」と言って、お互いの関係性を作るのはなかなかむずかしいわけであって、たとえそれが仕事であってもですね、関係性というのはそことは違う尺度、違う時間の軸のなかで出来ていくことなのだと思う。

柳沢　皆さんは気がつかないと思うのですが、関係性を作るときにお金は邪魔者なんです。特に行政から住民に渡すお金は一方通行です。お金という絶対物に動けば動く程、関係性はひじょうに作りにくくなる。

いままでの国から医療費でお金をボンと与えるのは、医療費として与えるわけです。それは人間関係を作るものではない。それでは関係性の構築にはならない。そういうお金の遣い方ではなくて、保母さん、保健師さんを派遣させるのにお金を使うことで、人間性の関係が出来ていくことになります。

待鳥　何を大事にするかだと思うのです。ここは大事なところだと思ったら、他の仕事はとりあえずおいてもそこに集中するという判断と融通をきかす柔軟性があるかどうかです。逆にそういうところがなければ、いくら地域のなかで関係性を築いていこうと思っても、これだけ忙しい仕事や活動をしているとそれは一切できないですよね。空いた時間で効率良く関係性を作ることはできません。

柳沢　関係性として学習できるのは対話です。対話をおこない関係性を作ってやると、カオスを覚えているので安心部分の範囲がひろがっていく。おのずとキャパシティが増えるから不安の程度は減るわけです。そうなると、何かが起こったときに焦り方も違うし、なんとかなるさという発想になっていくのです。

福島　そうなると、教育で変えられるということですね。

柳沢　はい。理論的には教育です。なぜはっきり言い切れるかというと、現代科学教育を受けていないものを見ればわかる。現代教育を受けていないものは断定がわからないから全部カオスなのです。自然界の動物などそうですね。もともと答えを与えられていない場合はいつも臨機応変をやっているわけだから、またかというだけなのです。

待鳥　コーディネートの話ですが、この人とこの人の関係性を作ってあげましょうというのはおこがましい話で、いまある自分をふりかえる、もともと自分の核にあるものは何だったのだろうと自分の原点をふりかえることが必要なのではないかと思います。けっきょくは、気づいた人が自分発で関係性を作っていくことから始まるのだと思います。

親が自分に自信がないからダメなんだ、というそこを取り戻すことが、価値観の変容のためには重要だと思います。産む前に自分自身の原点になるものをもう一度確認しなおして、私は私でいいんだ、私が育てるんだという自信を取り戻すことが必要ですね。母親学級で教わることはもっと即物的なことです。そこに、これから産もうとしている自分に対する自信をつけ、マニュアルどおりでなくてもいいんだというメッセージが伝わればいいのではないでしょうか。

福島　参加型交流型学習というものが現代の母子保健実践には欠かせないということは言われているのですね。家族全体を入れた支援型にすべきだとか、一方通行型講演教育だけでは対人支援型の学習は困難である、といろいろなところで書かれているのです。行政側も一方型がダメだというのはわかっているのですが、なんでダメなのかは断定しているからだというところには至っていない。

少子化が止まないひとつの理由

尾崎　少子化のいちばんの振り出しを考えてみると、結婚願望が希薄だということがあると思います。結婚しなくてもいいではなくて、結婚したいという気持ちになる、そこの研究がまだなっていない。今回、学校教育のなかで性教育が後退してしまいましたね。小学生中学生にセックスを教えるとはけしからんと禁欲主義的な方向にいって、社会の風潮では10代の妊娠はのぞましくないとなっている。私は宮古島などの例を見ると一概に10代の出産を否定する気持ちにはなりません。10代の出産は望ましくないと言われながら産むものだから、10代で結婚した人はすぐに離婚する。離婚したらけっきょく長期間次の子どもが出来ないわけです。

いまの日本社会の価値観のなかには、早くに結婚しよう、子どもを若くして産んでしまうおうというのはほとんどなくて、結婚年齢があがって、結婚しない人が増えていると言えます。

務台　結婚しないで少子化に貢献してしまっているひとりですけれども、今回調査で宮古島に行かせていただいて、すごく目からうろこだったという体験をしました。民宿でご飯を食べていたら「何をしにきたの？」とおじさんに声をかけられて、「厚生労働省の研究班で少子化対策を調べに来ました」と言ったら「そんなね、人の少子化対策しているよりも自分の少子化対策をしたほうがいいんじゃない」と言われたんです。私が自分が子どもを産んでいないのに人の対策をしているのはおかしい、とおじさんから指摘を受けたのですね。

まさにそのとおりだなと思って、なんで私は産まないというか、産めないのかと考えたときに、経済的にお金がかかる、相手がいない、社会から孤立しないように仕事を一生懸命していたい、自己実現して自立した独身って素晴らしいよね、子どもができると子どもに時間を取られて自分の人生がなくなってしまうみたいで不安だ、別のいのちに責任が取れない、ほんとうにいろいろな考えが浮かんできたのです。でも、けっきょくお金がかかる、相手がいないというのは言い訳にすぎなかったんだということに気がつきました。

別にお金がいっぱいあったからといって、援助してもらったからといって、子どもを産みたい気持ちにはあまり変化がないんだなと思ったのです。私は自分だけで生きていればいいんだ、という人だったと気がついたのですね。出産するということはいのちをつないでいく、遺伝子をつないでいく、人類の女の人としての役割をまったく考えないでいままで生きてきたわけです。

尾崎　若い人の物事の価値観は、かなりメディアに影響されているでしょう。早くに結婚すること、子どもを産んで育てることがしあわせで、ものすごい大事な社会貢献だという

のが一般論として、若い人が影響されるドラマにはまず描かない。子育てに対する価値観を知らずしらずにマイナス要因として植え付けている部分はカウントしにくいけれども、でも何かがある。

地域共同に根づいた世代間交流と子育て

務台　宮古島に行ったときに子どもがいっぱいいて、路地でボールを蹴っているのをみて、こんな場面ってみたことがあったっけ？という感覚にとらわれた自分にもすごくびっくりしたのです。インタビューからも、「転がしておいたら育つんだよ、産んだら何とかなるんだよ」みたいな返事がかえってきて、こんなおおらかな気持ちが自分のなかにはまったくなかった。ギチギチで、子育てはきれいに育てないと自分がイヤみたいなというところが、すごく自分を縛りつけていたんだということに気がつきました。

私は出産や子育てに関係している価値観を変えていくということが、少子化に影響を及ぼすんではないかなと感じています。どうやったらそういう気持ちになるのかは、ハッキリした答えはないんだけれども、いのちの大切さ、自然にふれることなのかもしれない。申し訳ないけれども、先輩お母さんが子育てをしていて、なんかうらやましいなと思う感覚があまり世間にないのです。子育てはすごく大変そうで、いつも愚痴を言っていてという、あまりいいイメージがないので、いい先輩が現われてくれると嬉しいなとすごく思う。

あるとき、ラジオを聞いていて、エッセイストが「私の人生は子どもとだんなさまに捧げてきて台なしだった。これからは自分の人生を生きるから留学したい」みたいなことを言っていたのですよ。ああいう影響のある人が自己実現は違うところにあって、子育ては余計なものだったみたいなことを言っていると、若い人は子育ては大変だと思ってしまうのではないか。子どもを産んで育てるのも自己実現だったはずなのに、それがいつかどこかで余計なことにこの人は変わってしまってお気の毒だなと思ったのですが、それをラジオで言って、聞き手のアナウンサーも「そのとおり。すばらしい、これからも頑張ってください」みたいな受け答え方で持ち上げていくのを聞いていると、日本もこの先どうなってしまうのかなと思う。逆に、それを聞いて悲しい感じをした自分に成長を感じました。

いま、価値観を変えていくことの大事さをすごく感じています。それを政策にどう結びつけていくのかが、すごい大事なところになっていくのかと思っています。

宮古島はみんな島全体が家族なんですよね。初対面の人から「空港に鍵がかかっていな

い車があるからあなた乗っていいわよ」と言われてすごくびっくりしました。でもこういうときは親切なのだから借りるべきなのよ、というところまで指導してもらわないと私は借りることができないと思ったのだけれども、でもとにかくやっちゃえという感じで借りて、ガソリンは満タンにして返さないと思ってガソリンスタンドに行くと「○さんの車、どうして借りているの？」みたいな感じで声をかけられる。みんな家族だから車はだれのか、いまどこの家が留守だとか島の人がみんなわかっている。安全面でもすごいセキュリティシステムだなということを体験しました。あの人のうちの子どもが具合がわるいと「どうしたの？」と誰かが気にかけてくれるあったかさがある。家にはカギをかけないし、いつもお茶の用意がしてあって子どもがそこで食べたり飲んだりして、寄り道しながら家に帰るという感じで、いつもひとりではなくて子どもが家に帰れるようになっている。むかしはみんなそうだったと思うけれども、いつのまにか自分の家にカギをかける、自分の部屋にカギをかけることで、こころにもカギをかけてしまうことがあるんだんと私は感じたのですね。

また、沖縄県では「モヤイ」という、相互扶助の精神がすばらしいと思いました。いつか困ったときのためにお金を少しづつ出し合っていろいろなモヤイを作っているのも、いいなと思った。モヤイをするために月に１回集まるらしいのですね。私はお金を集めるシステムとして集まるのかと思ったのですが、そうではなくとにかくみんなで会って楽しく過ごす。カラオケを歌ったりお茶を飲んだり、いろいろな人と会って話したいという気持ちが宮古の人にはある。

関係性を築くには、まず人に関心をもって関わるというところがすごく大事だと思いました。実際には人に関わるのはめんどうくさいし、自分が傷つくこともたくさんありますが、でもひとりでは生きていけない。そこで関係しないと楽しくは生きられないのです。ひとりひとりが人に関わるというのを政策にかかげるのは難しいのですが、身近な人に「どう？」と声をかけることが少子化を変えていくんだということに宮古島にいって気がつかせてもらい、自分の価値観を変える大きな出来事だったとありがたく思っています。

澤　いま務台さんのお話を聞いて触発されて思ったことがふたつあります。ひとつは、宮古島の子どもと都会の子どもと接していてどこが違うかなというと、いちばん最初に会ったときになんとなく私は試されているという行動を取る子どもは東京の方が多いということです。それは最初からまるごと受け止めるということに慣れているか慣れていないかの違いだと思うのですけれども、宮古島の子どもたちは別に知らない人についていく危うさとは違って、危険を察知する野性的な勘は残しつつ、まるごと受け止めることができるのです。自分が生きてきたなかで、周りの人にどれだけまるごと受け止められてきたかが関係するんだなと思いました。

もうひとつは宮古の多産の究極的な原因は「あまり深く考えない」ということです。私も宮古にいた時に、誘われて何度か先ほどの話に出てきた「モヤイ」に行ってきましたが、ただ単に楽しくてしようがなかったです。一度「宮古は多産で注目されているようです。」と地元の方に話した時に、「あまり考えていないからね。計画的に産もうと思ったら産めないよ。」といわれたことがありました。子どもを産まなくちゃと思って産むのではないし、モヤイをやらなくちゃと思ってやるのではないのです。自然と伝承されていくってこういうことなんですよね。

ちなみに、私はいま２４歳ですが、同じ世代の友だちのなかで結婚したい、子どもがいっぱい欲しいと言っているのはそんなにいなくて、私は珍しい存在です。でも、不思議なことに今回結婚も子どももいいやと言っていた友だちと一緒に宮古に行ったのですが、結婚してもいいかなと考えるようになったというのです。自分の家以外の家族と１０日間くらいの短い期間でしたが、過ごすことで改めて家族って楽しいなあと思ったと言っていました。

柳沢　地域共同に根づいた世代間交流、相互扶助の精神が色濃く浸透した宮古島に行ったことで、自分のなかで求めていることに気がつく体験をしたのですね。

尾崎　僕は数量的なところで何かを調べるということで、政策提言になるかどうかはわかりませんが、今回の少子化のいちばんの疫学的資料になっている合計特殊出生率から調査をしました。市町村というとかなり人口規模にばらつきがあるもので、厚生労働省の統計情報部が５年単位で報告を出しています。それは電子媒体になっていないので、人を頼んで全国の市町村の５年ごとの合計特殊出生率を手入力しました。それが表１の右側に離島は１、そうでないものは０で明記してあります。もう１つ、行ったことは離島かどうかというデータを調べて入力しました。これはある HP があって橋でつながっていても離島なのです。

今回２０年分を４期に分けて合計特殊出生率を出していますが、２０年間で市町村合併していない自治体に１が入っています。総務省の HP でこつこつと調べるとわかるのです。日本一の多産の多良間村は合併しませんでした。三宅島が三宅島市という１つの市になったのですが、多良間村のみ合併の枠から外れました。いま行っているのは、国勢調査最新データということで平成 12 年の市町村人口を入れています。単純な記述疫学的なデータを入れているのですが、おもしろいことがわかってきました。表１は平成１０～１４年の合計特殊出生率の高い市町村ベスト５０です。１９番まで離島です。離島でなくても、都道

府県でみてもらえばわかりますが、ほとんどが九州、沖縄です。合計特殊出生率の高い自治体から秘密をさぐるというのが昨年度の宮古島の調査でもあったのですが、市町村別の出生率が高いかどうかを決める圧倒的に大きい要素は、九州、沖縄の都道府県であること、離島であること、そして田舎であることです。上位５０に市はほとんどないです。21 番の平良市で、市ではじめて上位に出て来るのが宮古島です。３０番の石垣市が石垣島です。合計特殊出生率の高い自治体は九州、沖縄か離島、田舎であるということでだいたい話はすみますが、それで済んでしまうのではおもしろくないわけです。

次に丁寧にみていこうと、いろいろな分析を始めるわけです。自治体への訪問調査、郵送調査が時間的に間に合わなかったので、HP を使いました。いまや日本中の自治体が HP を持っています。HP を探れば、子育て支援のいい対策をしていればそこに何かは書いてあるだろう。子育て支援、少子化は専門家の問題ではなくて、市民、国民全体が関係する問題なので、住民に対して「うちはこんなにいい政策をしていますよ」と公表できる市町村がいいのではないかということで調べました。合併していないところを抽出したのは、むかしから引き継いだ政策をいまもやっているだろう、という発想です。合併してしまうと政策が変わるのですね。いままでの伝統を反映していないと困るので合併していないところに限ろうというアイディアで行いました。

これだけですと、南国で離島ならば子どもが生まれるというだけの話になってしまうので、４期にわけてむしろ出生率がよくなっているのをみつけるために２つのやり方をしました。表２の方はいちばん右の列で全３期の平均に比べて最終の期の出生率が高く、最終期の出生率がしかも 1.6 以上のところを調べました。１位は比は高かったので出生率を外しています。２位は三重の紀和町で、最終期が 1.73 でしかも離島ではない。ただし残念ながらここは合併しています。このなかで、合併をしていなくて最終期の出生率が高く、出生率が増えていて、しかも離島ではない町を探しました。何か変わった政策をしているかを HP で探しました。

表３は前半の１０年に比べて後半の１０年の比が高いところです。表２と似ています。同じような要領で離島は外しています。町といっても 3000 も自治体もあれば偶然変動でたまたま増えるところもあるかもしれないので、人口何万という市単位で出生率が増えるのは何かすごいことをやっているのではないかということで、最後の表４が、市であって合計特殊出生率の平成１０～１４年の値が高いところを探しました。沖縄の平良市が入っていますが、ベスト 400 番までのなかで市とつくものだけを残した表です。市は 50 ぐらいしかない。離島ではなく、合併をしていなく、しかも市なのに出生率が高く、沖縄や鹿児島ではないところを調べました。目につくのは青森県の三沢市、佐賀の伊万里市、熊本の人吉市です。市町村ごと別でみると不思議なことに出生率は南国が多いといったのに唯一例外

は福島県です。福島では何か変わったことが起きていると思うのですが、喜多方市が入ってきます。

このようにですね、これはと思う市をピックアップして、いまのような基準にあった自治体の HP を見るわけです。子育て支援のどこかが違うかの主な結果が表５です。ベスト５０から、鹿児島や沖縄ではなく離島ではないところを調べて結論としてわかるのは、その町にある施設、特徴的な政策を見ましたがあまり代わり映えがしない。少し面白いのは、全国の市が６００ぐらいあって市立病院がある市はそんなにたくさんないのですよ。出生率の高い市はみんな市立病院を持っている。だから公的病院を持っているというのが１つあるのかという予測がたちます。三沢市にはいま流行りの参加小児科外来がある。三沢市には施策はあまり書いていなかったけれども、施設は充実していますね。４万の人口で市立病院に参加婦人科があります。ファミリーサポートセンターという子どもを預かりセンターがあります。宮崎県の串間市はあまりたいした情報はありませんでした。佐賀県の伊万里市は市民病院はあるのですが、残念ながら小児科産婦人科ともにありませんでした。

施策のほうでは、子ども見守り隊が今年度からスタート、留守家庭児童クラブ、障害児発達支援センター、児童センターの施設があります。熊本県の人吉市は南ですが、ここは活動がいろいろ書いてありまして、次世代育成計画だと思いますが、健やか計画をたてるときに市民の方の活動として子育てマップを作り市内の医療機関の説明をしている、母子関係の年間のすこやかカレンダーを市民が作る、いろいろな市民参加の母子活動が書いてありました。しかも子育てのお手伝いということで託児サービスの会が複数あったり、いずみという大手スーパーに託児スペースがあったりいろいろな活動をやっています。京都府の舞鶴市は市民病院を持っています。小児科産婦人科のみならず子どもの神経や心臓の専門外来をもっていますし、いろいろな施策をしています。コントロール群として、同じ人口率で出生率がとても低い自治体も調べてくればよかったのですが、まあこのようなかたちです。山形県の新庄市も北国ですが、出生率は高いです。だたし HP にはあまりたいしたことは書いていない。滋賀県の栗東市も近畿地方ですが高いです。ここは障害児関係事業をよくやっています。発達の遅れに対して手厚いと感じます。

最後がよくなっていて、いちばんこれはと思ったのが大阪府の高石市ですね。市で出生率が高いベスト５０にも入っています。２９位で市なのに出生率が 1.8 まで今回あがっているのですね。市でなかなかこんなに比が高くなっているのはめずらしい。ちょっと注目して調べてみたらおもしろいと思います。市立の助産所を持っている。HP のなかにちゃんとその説明があり、携帯でも見れるようになっている。もし異常分娩に切り替わったときには、堺市の市立堺病院が後方支援病院と書いてあります。近くの自治体と連携をもっている。市立病院を持っていないかわりに市立診療センターを持っていて、外来専門の小児科も産

婦人科もある。市立の母子保健センターという助産所をもっていますし、お産を取るだけでなくて助産所で赤ちゃん交流会、両親教育などの母子保健事業をやっている。えらいなと思ったのが、いずみ保健所という管内保健所も母子関係のことをやってくれますと HP に書かれていました。地元の保健所の活動も報告してありました。

今後アプローチするならば、アクセスがいまの HP なので、この２０年間どうだったのかを調べられるといいといいですね。宮古島の話も現代の日本に対して１つのスローライフ、安全安心、お金がなくても子どもが育つといういい教訓がいっぱいあるのだけれども、それだけでは宮古島だからでしょうということになるので、それ以外の出生率の高い、離島ではない、南ではない地区の福島県あたりはおもしろいと思います。出生率の高い市をつめて調べていくと、根拠のある政策提言になると思います。最後は全国の自治体別の出生率の分布です。平成の大合併の２０年間のあいだに時々合併していますので、２０年間同じ市町村ではないデータは全部落としてあります。前後比較にならない。市町村別の出生率の分布は美しいせいき分布をします。途中から特に人口の少ない自治体の偶然変動による出生率を調整するためにベーズの定義というのを使って途中から出していますので、ばらつきが狭まりながら下がっているように見えます。

実は間に合わなかったのですが、気象庁のデータで南かどうかを確定するために平均気温を入れようとしたのです。分析して、統計学的に緯度を反映していると平均気温、市町、離島であるという０と１のデータを調べると日本の市町村の出生率のばらつき度の７０％はこれで説明ができます。３０％はそれでは説明できませんよという答えがでる。

福島　この後に聞き取り調査をやったらおもしろいですね。

尾崎　是非、大阪の高石市に注目してください。公立病院が効いているという仮説もなかなか示唆にとぶ。いくら出生率は下がっても安全安心というか、うちの自治体のなかで産めるという安心感と出生率はひょっとしたら関係しているかもしれない。同じ５万人前後の自治体で市立病院がないところはいっぱいあります。市立病院はあるけれども小児科産婦人科はなくなりましたというところは、出生率は下がるかもしれない。社会的なインフラみたいなね、いくら赤字でも自治体が持つ病院は地元住民にとっては意味があったんだと説明がつくと思います。

高石市の活き活きとした事例をレポートするとおもしろいですね。是非、市として助産所を持つのになぜいたったのか。昭和何年からいったいあるのか。いまのご時世にやめようかという話はあったはずなのになぜ存続できているのかなど、現場の苦労話とか、全体の出生率に占める助産所で出生している人の比率とか、統計プラス、高石市の事例などを現